"藩閥の砦" 山口県にも
自由民権運動は起った

山口県自由民権関係史料集

限定八〇〇部

田村貞雄編

マツノ書店

長防の士民は因循なり卑屈なり

立憲自由党結成の機縁となった防長大親睦会の檄文（史料㈠―⑥⑩、㈡―⑨）は述べています。

「イタズラニ藩閥ノ余功ニオコリ士民唯是レ官ニ汲々シ、名利ニ営々シ因循固陋一般ノ気風トナレリ、（中略）世人皆曰ク、長防ノ士民ハ因循ナリ卑屈ナリ、勲閥ヲ恃ミ公利ヲ擅ニシ国ヲ憂ル事ヲ為サス云々」

またこの会に出席した吉田松陰の甥樟堂吉田庫三は、「長防二州が幕府の末年に国事に尽くしたこともってかえって安逸、奢侈に流れ、利を取りて義を知らず、甚しきに至りては今や明治太平の時、必ずしも参政の権の望まぬというものがあり、実に慨嘆に堪えない、この親睦会の盛挙はまことに喜ばしく、長防二州十万之生霊は奮って志を合わせ憂国の義を唱えるであろう、自分は不肖ではあるが先生松陰の尽国の微衷をつぎ、諸君とともに奮然と自由の真理を抱き身を国事になげうち、諸県の人びとをして長防にもなお人ありといわしめん」と述べているのであります。（史料㈠―⑦③）〔本書解説篇より抜粋〕

こんにちなお「山口県には自由民権運動はなかった」という偏見が充ち溢れている。果たして山口県には自由民権運動は全く起らなかったのであろうか。

たしかに他県にくらべて活発な運動は山口県では発展しなかった。国会開設建白の動きは微弱であったし、著名な指導者も育たなかった。しかし山口県の自由民権運動はたとえ微弱であったとしても全くなかったわけではない。現在の研究段階では地元の一次史料による裏付けを欠いてはいるが、東京や大阪の諸新聞をみるとしばしば山口県関係の記事がのっており、そのなかには自由民権運動についての報道も少なからずあるのである。

岩国にあったと思われる錦川社、徳山・下松・加（ママ）木・岩国で活動した愛慮社、長防自由党に発展していった萩の先憂社、阿武郡明木の集思館とそれが一つの核となった立憲自由党山口県本部、改進党系と思われる馬関、豊浦の懇親会――このような政社や政党の活動は、すべて新聞記事から拾いあげたものである。

しかしこうした自由民権派の動きを巧みに封じ込め、県議会の多数を結集して政府支持に向わせることに成功したのが、県会議長吉富簡一のひきいる鴻城立憲政党であった。吉富は幕末の討幕運動の志士のひとりであり、維新後中央政府に出仕したが、故あって帰郷し、一時井上馨の先取会社に関係したものの後半生のほとんどを郷里にあって山口県政を支える地方政治家として活躍した。吉富の政治思想と鴻城立憲政党は、立憲帝政党のような保守主義の系列に属するのであるが、改進党の綱領の一部を借用し、改進党に親近感を抱く人々をも包含していた。

この吉富派に徹底的に対抗したのが町野周吉に代表される地租引当米不正糾弾闘争であった。周知のように山口県の地租改正は、全国の地租改正に先きがけて実施され、大幅な減租を生みだしたといわれている。これを指揮したのが長州出身の大蔵大輔井上馨と幕臣出身の初代山口県令（この時は権令）中野梧一であった。

この史料集には、山口県の自由民権運動にかんする基本史料を収録している。

本書の刊行をきっかけに山口県の自由民権運動の研究が本格的に着手されることを強く期待したい。

（本書「はしがき」より抜粋）　田村貞雄

目次

解説篇

一　山口県の自由民権運動
二　従来の研究と問題点
三　史料解題

史料篇

一　山口県の自由民権運動に関する新聞記事集成
二　『山口新報』関係史料
三　明治初期の山口県新聞史に関する史料
四　鴻城立憲政党関係史料
五　吉富簡一「囈語」その他
六　その他

山口県自由民権運動史年表

編者略歴

一九三七年　山口県徳山市に生まれる。一九六〇年　東京教育大文学部卒。一九七四年　静岡大学教養部助教授となる。

現在　静岡大学教養部教授。

著書　『殖産興業』（教育社新書）『地租改正と資本主義論争』（吉川弘文館）ほか。

■体　裁　A5判二五〇頁
■定　価　四、〇〇〇円（〒300）
■発　売　58年8月中旬

マツノ書店
山口県徳山市銀座二の一三
〒七四五 ☎〇八三四㉑二一九五

吉田松陰の甥も出席した民権運動

色川　大吉

今から百年前、世間が「薩長藩閥打倒」の声で湧き返っていたとき、薩摩には幾派もの民権結社があり、西南戦争以来の余燼をくすぶらしていたが、明治政府の金城湯池長州には、その痕跡すら見られないのではないかと私などは思いこんでいた。その迷蒙を打破ってくれたのが、本書の編者田村貞雄氏であった。

田村氏には長州自由民権運動の研究がある。それによると、長防自由党や防長大親睦会・馬関懇親会などがしばしば開かれ、中央の民権家と活発に交流していたことが知られる。とくに、防長大親睦会には吉田松陰の甥吉田庫三が出席し、自分は不肖ではあるが先生松陰の尽国の微衷を継ぎ、諸君とともに奮然と自由の真理を抱き、身を国事に投げうち、諸県の人びとをして長防にもなお人ありといわしめん、と自由民権への決起を訴えた事実を知って感銘した。そうした根拠となる史料を是非原文のままで読みたいものと念願していたところ、今回、地元徳山のマツノ書店の力で『山口県自由民権関係史料集』が刊行されると聞いて、同じ民権研究者として喜びに耐えない。来る一九八四年は自由民権百年記念の第二回全国大集会が開かれる折でもあり、誠に時宜を得た出版であると思う。

藩閥権力の牙城に新しい光を

家永　三郎

明治前半期は、多元的な潮流の渦巻く、さまざまの方向への歴史の展開の可能性をはらんだ時代であった。たとい帝国憲法体制に帰結する線がきわめて有力であって、後から見ればそれ以外の道の実現の可能性はなかったかのように思われるかもしれないけれど、あの時代の日本が、帝国憲法体制下の日本よりもいっそう巾広い選択の岐路の前に立っていたことだけは否定しがたい。

百年記念を契機に改めて大きくクローズアップされた自由民権は、そのなかでももっとも現代日本人の課題に直結する内容に富んだ動きであった。それが全国各地で下から展開されたのだから、各地方・地域での動向をたんねんに浮び上がらせることなしに、その全体像は再現できない。自由民権の反対極の藩閥専制権力の牙城である山口県について、多年めんみつな研究を続けてきた編者による基礎史料の集成が公にされることは、今まで学界で見落されがちであった部分に新しい光をあてるための、貴重な学術資料を提供するものといってよかろう。

自由民権運動の意義を考える貴重な史料集

遠山　茂樹

一昨年十一月、自由民権運動百年を記念する全国集会が開かれた。この集会を支えたのは、各地域の自由民権運動を研究しその意義を顕彰する運動をおこなっている全国各地の団体であった。その団体には、いわゆる研究者だけではなく、一般市民の方が多く加わっていた。このことは、百年前の自由民権運動が現代にとっていかに切実な意義をもっているかを物語っている。

それとともに自由民権運動の研究の上で、地域史の研究がきわめて大切であり、現に貴重な研究成果を生み出していることを反映している。自由民権運動は、日本で最初の民主主義を求めての国民運動であった。国民運動であるというのは、地域に根ざし、住民の生活に基礎をおいた政治運動だということである。

地域に根ざした全国的な政治運動であるという性格は、山口県の情況に典型的に示されているともいえるだろう。藩閥の拠点であるが故の運動の困難さをふくめての貴重な史料の発掘と集成によって、自由民権の歴史の意義は、新しい角度から照らし出されるにちがいない。